

# 戦争体験継承の試み

—葛根廟事件の生存者・大島満吉さんの語り—

新 保 敦 子

## はじめに

大島満吉さんは、戦前に「満洲国」の興安総省の首都である興安（現在の内モンゴル自治区ウランホト市）に居住され、1945年8月のソ連軍侵攻後の引き揚げの途中で葛根廟事件に遭遇した。同事件は、ソ連軍戦車隊（14台）の襲撃に遭って日本の民間人約1200名が壊滅的被害にあった虐殺事件である（無事に日本へ帰国した者は約120名）。当時、小学校4年生であった大島さんは、奇跡的に生還された。

こうした犠牲者の霊を弔うため、興安在住で葛根廟事件に遭遇した遺族のご家族が中心となって「興安街命日会」を組織し、毎年事件の起こった8月14日の午前11時に目黒の五百羅漢寺に集まって犠牲者を供養する慰霊祭を行ってきた<sup>(1)</sup>。大島さんは、お父様（大島肇氏）そしてご自身も、長年にわたって、興安街命日会の中心メンバーである。しかしながら関係者の高齢化にともない、慰霊祭は2023年8月14日をもって最終回を迎えることとなった。

筆者は大学の教育学部で「社会教育史Ⅱ」の授業を担当している。同講義は、明治維新以降の日本の近代化の中での社会教育の歩みについて考察するものであるが、戦前から戦後の社会教育の歩みを考える場合に、アジア・太平洋戦争は重要なターニングポイントとなっている。つまり、軍国主義の影響によって青年層を戦争へ動員してきており戦前の社会教育及びアジア・太平洋戦争の惨禍の反省から、戦後日本の社会教育は出発しており、そうした戦争の実態を学生さんに少しでも自分の事として理解してもらいたいと考えてきた。

葛根廟事件は、敗戦直後に満洲からの民間人引揚者が遭遇した最大級の悲惨な事件であるが、これまであまり語られることがなかった。犠牲者が多く生存者が少ないこと、あるいは生存者自身が絶望の中で、自分の家族に手をかけざるを得なかったため、決して語るができなかったという事情もある。その中で、大島さんのご家族は、5人が生還された。大島さんご自身も、お母さまが生きておられる間は、体験を語ることはなかったという。ただし、このまま事件を無かったことにしていいのかという思いから語り始められたという。戦争体験者が高齢となり、体験が風化しつつある中で、大島さんは、サバイバーとしてリアルな体験を次世代に伝えることができるきわめて貴重な存在といえよう。

大島さんに初めて早稲田大学に来ていただいたのは、2009年のことである。岩波ホールで『嗚呼

満蒙開拓団』の映画が上映されて、その折に羽田澄子監督と大鳥さんの対談が企画された（2009年7月22日）。大鳥さんのお話に衝撃を受けた筆者は、大鳥さんの話を学生さんにも聞いてもらいたいと思い、「社会教育史」の授業にゲスト・スピーカーとしてお招きした。その後、大鳥さんを数回にわたり招聘してきた<sup>(2)</sup>。

本稿は、2022年11月15日の授業のテープおこしをもとにしている。大鳥さんの語りは、大変に力強く心に響くものである。そのため、言葉の言い回しなどは、実際に話された口調を尊重して記録化してある。

葛根廟事件の生存者の声を集めた体験記は、『葛根廟事件の証言—草原の惨劇・平和への祈り』（興安街命日会編，新風書房，2014年）に収録されている。本書には、大鳥さんが葛根廟事件について話をされた講演記録も収録されており、文字おこしにあたっては、この講演記録も参照している<sup>(3)</sup>。

また、授業においては、大鳥さんの話を聞いてのコメントを学生さんに書いてもらっている。大鳥さんの語りを学生たちがどのように受け止めたのか、学生たちのコメントカードの内容を大鳥さんがまとめておられるので、それも合わせて本稿で紹介したい。

## 1. 人間の運命

おはようございます。私の名前は「満吉」ということになっております。満というのは、「これからの将来の満洲というのは日本にとって非常に大きな財産になるだろう」、そういう意味で私が生まれたときに満吉という名前を付けたんだそうでございます。

葛根廟事件というのは、町の中で1200人の人たちが移動をしたんですが、結果的に大混乱がありました。想定外のことが次から次へと起きてしまう。人生はどの人にも平たんな道ばかりじゃない。上り坂もあれば下り坂もある。その中でまさかという坂にあったときに、どのように生きたら生きられるかといっても、100パーセント私は運命だと思っております。運命はもう動かしようがない。けれども、そうだとしたら、それだけに精いっぱい、自分の生きてる時間を最高に最善を尽くすという努力は必要だと思うんですね。

葛根廟事件で1200人の移動した皆さんの中での生き残り、日本に帰れたのが120人ぐらいですから、1割しか帰ることができなかった。約9割の人が葛根廟事件で結果的に命を落とした。じゃあ、どうやって生き残れたんだ。

戦争の話というのは正直なところ話したくないこと、話せないことがある。そのことを今になって何十年たって、黙って話さない、話せない、そのままお蔵入りにしてしまっていていいのだろうか。何か残しておかなくちゃいけないんじゃないか。80歳を過ぎるとだんだんにそんな思いがあって、今までは話せなかったことも少しずつ話せるようになったという現状でございます。

## 2. 興安省と兵隊について

これからお話し申し上げます葛根廟事件というのは、満洲の興安省でのことです。興安省は今でいうと内モンゴル自治区です。日本が満洲国を占領したときに名前を勝手に変えて興安省にしてしまったんですね<sup>(4)</sup>。満洲は広いもんですから、興安省だけでも面積は日本の全土とほぼ同じくらいになるんです。興安を四つに分けて、東西南北の省にして四つの省があった（興安東省、興安西省、興安南省、興安北省）。それを1つにまとめて、興安総省とし、四つの省を総括する省の省都が、私たちが住んでおりました興安という町だったんです。

省都ですから、軍隊、役所が充実しておりました。それでも人口は3万人しかいなかった。全部の民族、合わせてです。日本人はそのうち3000人ということは、1割しか日本人はいなかった。それでこの興安総省全体を統括していたわけですね。

ここには、満洲国のための軍隊、興安軍（興安総省を管轄した満洲国軍、兵員はモンゴル人により構成）もいた。そして地元の軍人の幹部を育てるための軍官学校（興安軍官学校）もあった。特務機関も、憲兵隊もあった。日本のいろいろな軍の組織や中枢がこの興安街にいたってということになると、私たちは戦争が始まって大したことは起きないと思っていました。

私が興安の町にいたときに、召集令状がばたばた来て、関東軍を補充しました。そのときに、一般の宿舎じゃ足りなくなって、わが家の並びにある民家が宿舎になって兵隊が毎日、出たり入ったりしてました。

そのときに私がたまたまいたら、「満ちゃん、鉄砲の扱い方を教えるからうちへ上がれ」そう言われた。4年生になったばかり、鉄砲なんて持ったことない。だけど、教えるから上がれって言うから上がった。そしたら鉄砲の扱い方教えてくれた。それで「引き金をこうやって、弾をこうやって入れて、こうやって抜くんだよ」って言われても、4年生には引けません。大人の人は軽々と持ちますけど、実際に引き金を引けなかった。そんなことで兵隊とお付き合いをしていたんです。

私たちがいた興安街の近くに葛根廟（チベット仏教寺院、満蒙三大霊廟の一つと言われた名刹）があるんですけど、その距離はわずかに35キロくらいしかないんです。東京から大体、横浜ぐらいでしょうか。とにかく、その間、人がいないんです。

## 3. 避難の開始—8月11日

この興安に住んでいた時に、いきなりソ連が日本に宣戦布告をしたんです（1945年8月8日）。首都だから、ソ連の飛行機がその首都を目掛けて、8月11日に爆弾で爆撃したんです。自分たちは、逃げ場はどこだって考えていなかった。防空壕だけは作ってあって、飛行機が爆弾を落としたときに防空壕の中に潜れたから、そのときは難を逃れました。爆撃の後、外へ出てみたら、電話局が破壊されて通信が効かなくなった。電気が壊れて通じなくなった。これからどうするんだということになったんですが、初めて空襲を受けたから、お役所の人たちもどうしていいか分からないわけですね。取

りあえずここを避難しようということで私たちは避難民になったわけです。

最初の想定外のできごとは、避難というのは退去だったということです。お役所から6時までここに集まりなさい、これから避難しますという命令があったわけですね。戦争の場合の避難は、その町を撤退、あるいは退去、そういう意味だった。ところがそれが退去だったということは知らなかったんです。もう二度と帰れない。しかし、退去という言葉は使いません。

私の家ではたまたま父親が建築屋だったもんですから、リヤカーがあった。当時は戦前で1945年のことですから、まだ一般の国民は自動車っていうのはなかったんですよ。お役所ではトラックがある。軍隊ももちろんトラックとかそういう最新の機器は持ってました。けれども、一般の人たちでトラックを持つことはなかった。その時代にたまたまわが家ではリヤカーがあったもんですから、5年生の兄と4年生の私とで主に荷物を積み込んで外へ出た。

途中の道路に、爆弾が落ちて穴が開いて、リヤカーのタイヤがはまって出さずに出せずに、とても困りました。大人の方がたまたま来てくれて、よいしょと押したら簡単に上がったんですよ。大人の方と子どもの力じゃ随分違うなと思いました。

そういうことがあって、集合場所にきたら、全部で1200人集まりなさいと言っているのに6時までに400人ぐらいしか来てない。特に問題だったのは当時、子だくさんだったことです<sup>(5)</sup>。避難のときに、一番困ったのは子どもが5人も6人もいるのにお母さん1人しかいないことです。召集令状でお父さんを取られていて、荷物を運ぶのは、子どもだけではできないので、お母さんは大変です。

これは、「根こそぎ動員」のためです<sup>(6)</sup>。終戦直前に、本当の軍人を全部、南方戦線へ持っていったんです。だから関東軍から、軍人がいなくなった。それで数合わせのために、満洲国では片っ端から召集令状を出して「根こそぎ動員」をやった。私どもの小学校では全部で、男の先生が7人いたのに4人の先生が召集令状で兵隊に動員された。残ったのは校長先生と6年生担任の先生と、もう一人の男の先生だけで、結果的に4人も先生がいなくなった。それと同じように町では男の人が次々召集令状を受けた。そのため、お母さんが、2人分、3人分の荷物を運ぶ。その上に子どもがいるんですから、お母さん1人ではできないですよ。

ですから集まられて言われたときにも集まらなくて、とうとう夜の10時頃になったんですが、ようやく出発した。

我が家はリヤカーで荷物を運んでいましたが、途中で「大島さん、悪いけどこの荷物一つだけ積んでくれませんか」、「大島さんこのトランク一つだけお願いします」、「この風呂敷包み一つだけお願いしますよ」って次から次へと頼まれた。「私がリヤカー引きますからこれ乗せてください」、「私がリヤカーを押すからこれに乗せてください」って頼まれて、私と兄はリヤカーから離れた。大人の人たちが荷物を積んで運んでくれることになったから。

うちには愛犬のチビっていう犬がいた。その犬と私たちにとっては散歩みたいなもんですよ。当時、犬はひもでつるしてなかったんですけど、犬は分かりますからね。一緒になって遅れても、早くなくても、ちゃんと家族の所に行きます。愛犬のチビを連れて、私たちは楽しくピクニック気分で避難の

行動に入ってしまったわけです。

しかし翌日（8月12日）になったら、リヤカーがなかなか来ないんです。どうしたんだろう。母が自分で持っている荷よりもリヤカーに積んであるほうが大事なものばかりなんだって嘆くんですが、実はここで、再び想定外なことが起きた。このリヤカーがパンクして動かなくなっちゃった。動かなくなったときに荷物を上に積んでる人たちは、自分たちの荷物を持って動く。ところが、私たちはリヤカーの側にいなかったから、もうだいたい歩いているのに自分たちの荷物は全部、置いていかれちゃったんです。だから一番たくさん荷物を持ったわが家が何もなくなった。こういうことは全く想定外のことでした。

#### 4. 8月13日の朝一チビとのお別れ

13日の朝になりました。いつもは、私たちが朝起きて、どこいるかなと思ったらちゃんと待ち構えてるようにチビが飛び上がって、会えたって喜んでくれた。しかし、この日はチビが違うんですよ。ズボンの裾にまつわりついて離れないのです。

母が兄に「おまえね、チビなんかあるんだよ、おまえチビに付いていってみなさい」って言われて、兄が何だろうって行ったら、チビが赤ちゃんを産んでたんです。私たちが行くことをチビは分かっているから追っかけてきて、誰か残ってって、足にまつわり付くわけですね。だけど避難民の自分たちの中隊も全部行ってしまい、困った。「もうどうしようもない、生まれたての赤ちゃんはどうしようもないんだから仕方がないよ、これは運命だね」。母さんはそう言って諦めちゃった。

私たちが出ようとするするとチビが追っかけてきて、誰か残ってって言うわけです。でも、またすぐ自分の巣の所に戻ってっちゃうんです。赤ちゃんは生まれたてですから温めてあげないと、1人では生きていけないわけだから。母親ですね、すぐに戻っていっちゃう。私たちが別れづらくて、「チビ」なんて呼ばなきゃいいのに呼んでしまったりするもんだから、チビがまた飛んできて、誰か残ってって言うんです。母が目を赤くして「なんて可哀想なことになったんだろう、どんな動物でも我が子がみんなかわいいんだね」と言いました。

そんなことがあって、チビとお別れしてしまったんですが、それも私たちにとっては想定外のことでした。戦争でなければそんなことはないんだけど、本当に何が起きるか分からない。こんな状態で私たちの1200人の一団が、ずっとぞろぞろと14日にかけて動いていくわけです。

#### 5. 運命の8月14日

14日の11時半頃でした。私たちは四中隊といって4番目、真ん中ぐらいいいたんですが、荷物がなくなったから、一番先頭のほうに行った。父はそのときに、男の人はほとんど召集令状で行ってるから、この一団の警護、警備をするために鉄砲を持たされて、脱落者がいないように一番後ろのほうにいた。兄は何かあって、一緒じゃなかった。母親と私と弟と、3歳になる妹がいたんですが、その妹は母がおぶってたんです。とにかく葛根廟まで35キロ歩くんですから、1日2日かかりますよ。

子どもがいっぱいいますから、1日に10キロぐらいしか進まなかったんだと思います。

その当時、関東軍がなんでいなかったんだ。町の中で幅を利かしていた関東軍は、命令で全部、通化という場所に集結していたんです。そういうことを国民には知らせなかった。知らせると「戦争が始まった、日本人が逃げたよ」というふうに見られてしまいます。何と言っても9割が地元民ですから、日本人は1割しかいないんです。9割の満洲族（漢族も含む）、韓国人（朝鮮人）、モンゴル人、あるいは中にはロシア人も、白系ロシアの人もいたんです。そういう人々は「日本人が、がらがらってなくなった、何かあるよ、これはソ連と戦争が始まったんだよ」ということを聞きますと、日本に味方をするか、日本人から離れたほうがいいんじゃないのか、そういう迷いが生まれます。関東軍がいないなんていうことになる、今まで治安が良かった町の中が大騒動になってしまいます。それで関東軍は極秘のうちに通化へ撤退をしたんですね。そして軍隊はあくまでも自分たちの組織を守るためのものであって、国民を守るためのものではないんです。

それを知らないから、戦争が始まったら、当然、関東軍の人が戦ってくれると思いました。ところが関東軍がいないどころじゃなくて、彼らが撤退するために役所のトラック、それから荷物を運ぶために町や村の人たちの馬車を調達したんですね。私たちが引き揚げるときに子どもを馬車に乗せたかった。あるいは荷物だけでも乗せたかった。しかし、関東軍が持っていったので、馬車はない。みんなてくてく歩いて、1キロ、2キロと離れていった。

## 6. 葛根廟でのソ連軍の襲撃

私たちが、葛根廟までもうすぐで、建物の端が見えた時です。でも、後ろには子連れの高い行列が伸びていた。そこで休憩をすることになった。しかし、喜んで休憩をした途端に指揮官から「戦車だ、逃げろ」と号令がかかった。

戦車だって言うから見たら、丘の稜線の所、なだらかな丘なんですけども、戦車が現れた。それがガガガって動き出した。当時、真夏で8月なのに満州っていうのは気温がうんと違うもんですから、夜のために学童用オーバーっていうのを着させられていたんです。夜寝るとき非常に寒くなるからね。そのオーバーを草の上に敷いて、妹の美津子を寝かせて休ませてあげていた。母はあわてて美津子をすぐに背負って、私は外套をわしづかみにして一生懸命、走りました。

どのぐらい走ったのか分かりませんが、大体200~300メートル走ったんでしょう。そうしたらありがたいことに壕があった。くぼみですね。その壕の中にまっしぐらに飛び込んだから、戦車の襲撃からは取りあえず助かったんです（筆者注；この事件の生存者は、先頭付近にいた家族が多い。後方にいた人々は戦車の襲撃で命を落とした）。

壕の長さ50メートルぐらいあるんですけど、幅がちょうど地下鉄の線路が3車線くらい通るくらいにくぼみだった。

その中に飛び込んだから、勢い余って、その向かい側のほうへ行ったんですね。戦車はこういうくぼみの中に入ってこないのが分かっているんですから、急いで飛び込んだ。しかし弾が飛んでくる。

戦車の音っていうのはすごいんですよ。ブーってエンジン吹かす音もありますが、鉄の音、金属の音ね。キャタピラのカチャカチャとものすごい音。Uターンするときなんか地響きます。振動するんです。あのすごい音で、そこへさらに銃声が走るでしょう。それで人が逃げる。「助けてっ」て、ガーって人が撃たれていく。そういうような戦闘がその場で始まった。私たちは、たまたま壕の向かい側へ着いたんですけれども、弾が飛んでいる射程方向になっちゃった。反対側にいけば、あるいは弾が避けられた。そのことは後で分かったんだけどもう間に合わない。ピューピューっていうような音がして弾が飛んできちゃう。

ふっと見たら、後から来た人たちがちゃんと反対側に張り付いてた。そこに30人ぐらいの人が固まっていた。あっちへ行けばよかったな。もう今更、動けないしなど。そういう一瞬の違いで人生がどうなったか。

弾が途中で飛んできて土手にピシャッと入るときにサッって音がするんですよ。銃を持っている人たちは、特に動くものを狙う訓練をしてるんでしょうね。逃げるものを撃つ。私たちもそこから動けない。そして30分過ぎたら静かになって、戦闘がもしかしたら終わったんかなと思った。

そこにたまたま兵隊が4人、壕の中に入ってきたんです。それを見たとき私は日本の兵隊さんが応援に来てくれたんだと思った。そうしたら、それがソ連の兵隊だったんですよ。どんどんこっちに来ちゃうもんで、母親が頭を伏せなさいって頭を押さえられて、私は伏せてたら、壕の中で砂利ですからガサガサガサって音がします、軍靴でね。真後ろまで来ました。このまま殴っても殴られる場所にいたんです、私たちは。

ですけど、反対側に30人ぐらいの大勢が固まっていたのを見たソ連の兵隊は、そのこの男の人が鉄砲を持っていたのを見つけた。自分たちだっていつ撃たれるか分かんないから、そのこの集団に目がけてババババ、みんな撃っちゃった。私の背中の中から音がして、30人固まっていた全員があっという間に死んじゃった。その兵隊さんはさらに奥へ奥へと行った。

私たちは困っちゃってね。また次の兵隊が来るんじゃないか。向こうから今、行った兵隊が戻ってくるんじゃないか。そういうこともあるから、じーっとして動きが取れない。あそこに行けばよかったと思ったが行かなくてよかったんですね、結果的には。こんなのもう運命ですね。もうどうしようもないわけですから。そこに行けば安心だったかもしれないのに逆にそれが災難の災いになって、全員が死んだ。その壕の中に大体20分かそこらいたと思います。8月の14日ですから真夏ですね。暑いですよ、満州だって。みんながいなくなって戦車の音がガタガタッと、号砲が鳴って移動していったのが聞こえたので、分かるんです、戦車が動いたな。これで戦闘やっとならなくなったんで分かった。

みんな死んじゃってるから、誰も他に生きてる人はいない。父親も鉄砲を持たされたから、どっかで死んでる。だから「先に遺体を探してから何とかしなくちゃいけない。これからちょっと歩こうね」って母が言って壕の中を歩いた。壕は50メートルぐらいしかないんですけど、その他に小さな壕がいろいろあったり、平原の上に死体がいっぱいあって、傷ついた人が手を上げて「水が欲しい」

「水を下さい」って言うんです。真夏で、けがをした人は特にけがの所に熱があるから水が飲みたいんですね。

母親は壕の中で探したら、水たまりがあった。その水たまりから、弁当箱で水をすくって、泥水ですよ、泥水をこの水筒の中に入れ、水を下さいと言う人にあげてた。

小1時間ずっと探しながら、そんなことやってたんですけど、ほとんど私たちも疲れちゃって、ちょっと休もうっていうことになって、この壕の反対側に上がった。畑の中に入ったら、疲れが出た。昨日の朝、今朝だっのご飯食べてないんですよ。その前の日だって夜、食べてないんですよ。その畑の中でどうしようかねって言ううちに眠っちゃった。2、3時間寝たんでしょうね。それで母親が「また探しに行かなくちゃ。ここにいられないから、もう一遍、探しに行こうね」って言って、それでもう一遍、壕に戻るようになった。

## 7. 母親の絶望

戻ったらやっぱり人がいなくて、そのとき母は覚悟した。「どうしようかね」って私に言った。「どうしようかね」っていう話だったんですけども、母は死ぬより仕方がないねという同意を私に求めた。私も返事に困った。だけど死にたくはなかった。

それで降りて行ったら、在郷軍人といって退役軍人の人がいたんです。その人が生きてる人の名前を手帳に書いていた。40人ぐらい今、生きてる人がいますって言うんだけど、その名簿を見ても父の名前も兄の名前もないから、生きてることはないんだなど。

その在郷軍人の人が、「残念ながら指揮してきたこの一団、全部、壊滅状態になりました。皆さん方を指揮してどこかに移動することができなくなりました。これから以降は自由行動にさせてもらいます」。今まで一団として連れてきてくれたんだけども、こんな野原にほっぽり出されて、これから先は指揮できないと言われたので私たちも困っちゃった。

そしたら、また次の入れ替わりの在郷軍人の人が来た。そして「大勢、傷ついて動けない人がいっぱいいます。その人たちは死ぬこと、自決することを望みます。最後に、自決を希望する人たちはこちら側の、〇〇メートル離れた場所に集まってください。小さい子どもを連れてくる親は、小さい子どもさんはそれぞれ親の手で始末してください」と言って引き上げていった。これは運命かな。母はもうこれで絶望を、言い渡されたようなもの。小さな子どもは自分で始末しろと。

先ほどの30人ぐらいいた塊の中へ戻って、母は亡くなった在郷軍人の人が腰に下げている軍刀を抜こうと思ったら、その人、死んでたと思ったら生きてた。生きてて、気が付いて、「奥さん、早まっちゃあ駄目だよ、生きるんだ。早まっちゃあ駄目だよ」ってその人が言った。最後の声を掛けて、「自分は死ぬけども、あんたたちは元気なんだから何とか逃げなさい、生きるんだよっ」ということを言いたかった。

だけど、母はもうそれ以上どうにも生きる道が自分では見つからなかった。その軍刀を無理やり抜いて、結果的に3歳の美津子を寝かして、「ごめんさい、母さんもすぐ逝くからね」って言って美

津子の喉に軍刀を当てて、美津子はそこで命を取られた。私はそれを見ていて、死にたくないと思って、だんだん後ずさりしていった。そんなことで母はもうこれ以上は駄目だ。みんなが死ぬって言うところまで行くしかないって言って、そこに集まることにしたんです。

## 8. 自決の列に並ぶ

次第に夜の6時、7時になりました。そのときには町の中に日本人が大勢、死んだのを聞いた部落があって、部落民の人たちが、死んでいる人たちのものを頂きに来た。籠を持って、靴、ベルト、下着。風呂敷包みが落っこちていたら、それを頂いちゃう。日本人のものは地元の人たちに比べればいいものを持っているわけですね。その日本人のものを脱がす。死んでいるんだから、頂いても何の罪も感じない。全部はがしていく物取りが何人か現れました。そんなことをしていると自分たちも最期はあんなことになっちゃうんだな思いながら、自決の場所まで歩いていった。

そしたら隣組にいた学校組合長をやっていた橋本さんに会った。私の同級生がいるんですが、同級生は死んじゃった。お母さんが恵子ちゃんっていう妹の2年生の女の子を肩車して連れてくるんだけど、「痛いよ、痛いよ、お母さん、痛いよ、痛いよ」って泣くんです。痛いよって言われても、こんな所で手当てのしようがないんですよ。薬も包帯もないしですね。痛みを止めるのは死んでもらうしかないんですよ。

お母さんは本当に困っちゃって、恵子ちゃんの首を絞めた。絞めたら死んだと思ったんだけど、恵子ちゃんは息を吹き返しちゃう、「お母さん、死にたくないよ、死にたくないよ」って、こう言われた。お母さんは気が狂ったようになって、とうとう全力で絞めた。そういう自決の場所があちこちにあるんです。傷ついて、苦しんでいる人もいるんですけどどうにもならない。手当てのしようがないんですから。

そんなことで、自決する所に、並びに行こうとした。そしたら小山校長の子どもたちが4人現れた。これも隣組だったんです。お母さんも死んで、お父さんも死んで、4人の子どもだけが残った。その4人の子どもたちの一番上の子はうちの兄と同級生で蓉子ちゃんっていうんですけど、蓉子ちゃんが「おばちゃん、私どうしたらいいか分かんないの」って言ったの。母でもどうしていいか分かんない。5年生の子が下に3人連れて歩いてきて、「おばちゃんどうしたらいいか分かんないの」って言われても、本当にどうしようもない。だから「私たちが死ぬこと決めたの。自決の所に行くのよ。小山さん所も、行ったら」っていうことで行った。

自決するっていう人たちの所で並んでいたんです。70～80人いたでしょうね。7時か8時になった。暗くなり始めていたんですけど、その中で、悔しいからってお札を出して、お札に火付けて燃やしている人がいるんですよ。「何しているの」って聞いたら、「いや、俺たちが死んだ後、こんなもん体中から、盗られるのが悔しいから燃やしちゃうんだ」って燃やしている。

ところがその中で、後で計算して分かったことなんですけれど、その時点では1200人いた人たちの中で、このソ連の襲撃で殺された人、死んだ人は恐らく600人前後で、あと600人ぐらいどっかで

生きていたんじゃないか。傷ついて動けない人が何百人かいたとして、まだ生きている人がいたんだと思うんです。ただ、それは後の結果論であって、その時点ではもう生きている人はこれしかいないというように思い込んでしまう。

そういうことで私たちは自決の順番を待って並んでいた。最初のほうはピストルがあったから小銃で銃殺。ただ銃弾の音がダーンってする。ソ連の兵隊がまた戻ってきてわれわれを襲撃するんじゃないか。それはやめとこうって言って結局、刺殺になった。その当時からわれわれの団体の中には青酸カリという毒物を、万が一のときはこれを飲んで死になさいということ会社の人から渡されていた人たちも、いたんですね。青酸カリを飲んで死んだって人は、楽なんでしょうけど、喉をこうやられて死ぬってというのはあんまり嬉しいわけじゃないですよ。

## 9. 近づく自決の順番と壕からの脱出

順番がだんだん私たちの番のほうまで近づいてきた。そしたら、3人ぐらいの在郷軍人の人たちでやっていたんですが、「あと残り15人ぐらいだな。こんなに疲れちゃって、なかなか大変なものだな。ちょっと休もうや」ということになって、一息入れることになった。私たちは並んで待っていただけでも何となく嫌なのに、それがさらに伸びた。だから非常につらかったです。

そうしたら小山校長のお姉ちゃんの蓉子ちゃんがリュックから、最後の晩餐会やろうって自分で風呂敷包み広げて、全部食料を出して、その中に角砂糖や煮干しがあった。そういうものを「つまみなさい」。私に「このそうめん食べられるのよって、食べなさい」、こう言うんですよ。そうめんを今から死ぬ人が食べてもどうしようもないね。食べたいなんて思わないんだけど蓉子ちゃんが一生懸命、勧めるもんだから、2、3本抜いてポリポリって食べてみた。しょっぱい、変な粉っぽいだけでおいしくも何ともなかった。だけど、「もうどうせ死んじゃうんだから、こんなもん持ってたってしょうがないんだから」と蓉子ちゃんが囁き立てた。そんなことがありました。

もう夜の10時ですよ、真っ暗になって分からない。そしてなかなか進行しないので、(死ぬ順番を)待っていたら、そこにまた物取りみたいなのが壕の中まで入ってきた。だんだん近づいてくるので、何だかこんな所まで近づいてくるのは嫌だなと思った。そしたら目の前に現れたのが父と兄。それで「おまえたち生きてたのか」、「あんたたちも生きてたの」と、母とやりあっていました。実は私たちがこちらの畑の後で上がって一休みしていたときに、父はこの壕の中に一回、来ていたんですね。そんなこと私たちは、すれ違いで分からない。

父は最後の最後の土壇場で、念のためもう一回、見に行こうと壕の中に入ってきたら、私たちに会った。母は「私は自決することに決めた。美津子が死んじゃった。この死んじゃったところで私は一緒に死ぬって決めた。だから私はここで死ぬから、あんたがどうしても行くんだったら2人の子どもを連れてってちょうだい」と。

父は困って「おまえたち無傷なんだよ。無傷なんて奇跡なんだよ。私が頑張るから大丈夫」と言った。父は10年、満洲にいたから満語（漢語のこと）がペラペラで、誰に会っても話し掛けられるわ

けです。だけど私たちは誰も満語は分かりません。それと使用人を使う生活ができていたんですけれども、使用人に対して、父はやるべきことはちゃんとやって、搾取していなかった。だから自分でも自信があったんでしょう。「絶対、大丈夫だ。俺がいるから大丈夫だ」。

母はそのとき自分が美津子を手がけたってということで、どうしてもそこで死ぬと決めていました。私は後で知ったんですけど、母は妊娠してたんですね。それから4カ月後、避難して長春にたどり着いたときに赤ちゃんを産んだんです（母乳も出ず、数日の命で亡くなる）。

こんな草原で父親がいないんですから、子どもを連れて、もし出産のときが来たらどうしたらいいんだ。だから私はもう絶対これ以上生きられないんだということを母は認識していたんですね。

父はそれも知ってるから「大丈夫だ、俺がいるから大丈夫だ」と言って、とうとう母を無理矢理引っ張り上げて、壕の上に上がった。しかし隣の小山校長の子どもたちを置いて行った。黙って私たちはその人たちに何も言えずに、わが家だけでこの壕の外に上がってしまった。それが、呵責の念っていうんでしょうかね。誰にも告げずに自分たちだけで逃げたっていうのが、やっぱりつらさもありますね。

そしてそこから40年後、残留孤児が中国から来たので、身元調査に行きました。そのときになんと小山校長の一番下の3歳の子が日本に帰ってきた。あなたたちはあそこで死ななかったのかっていうこともあるけれども。その子に会ったときによく生きててくれたねって一言、言いたかったけれども、涙で声が出なかった。ごめんね、そういう感じだったんでしょうか。

そんなことで葛根廟事件の現場から脱出することができた。このとき私は、自分では死にたいと思わなかったけども、そういうことが結果、良かったのかどうか分かりません。父がそんな所に現れるっていうことも分からなかった。何がどういふふうに変換して生き残れたのか、もはや幸運と言うしかないと思います（筆者注；大島さんのご家族が、生還できたのは、お父様の存在が大きい。多くの興安街の家族は、一家の大黒柱である父親を「根こそぎ動員」のため1945年の段階で召集されていたので、母親と子供だけの引き揚げとなり、結果的に葛根廟事件で命を落とした者が多い）。

これが葛根廟事件の第1部です。第2部、第3部と日本に帰ってくるまで、まだ大変なことになるんですけど、取りあえず後のことです。戦争の現場はこういうものなんだということを皆さんに知っていただけたらと思います。以上でちょうど私の持ち時間ですので、終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

補足：年によって大島さんは、残留日本人孤児で、中国人の両親に育てられ教師となって中国に生きたウユンさんのことを紹介している（本稿のもとになった2022年の講義では、時間の関係から割愛）。中国人がいかに残留日本人孤児を育ててくれたのか、その恩義に応える形でウユンさんが、ホルチン沙漠の砂漠化をくいとめるためのどのような植樹活動をおこなったのか、日本のボランティア団体がどうやってそれに協力したのか、という内容である（原田一美作『烏雲物語—ホルチン沙漠に生きる中国残留日本人孤児』、絵：米田美継、写真提供：烏雲の森沙漠植林ボランティア協会、徳島

県教育印刷，2001年，参照）。

## 10. 大島さんの講演に対する学生のコメント

大島さんの話は重い内容であり，大島さんが涙ぐみ言葉につまる所もあり，お話が終わった後，質問が出ることは，ほとんど無い。しかしながら，学生たちは熱心に耳を傾け，またコメントを書いてくれる。毎回の学生さんのコメントについて，大島さんは，分類・整理して筆者に送ってくださっている。筆者も，こうした整理されたコメントと学生さんのコメントに対する大島さんの感想を，プリントして学生さんたちに渡している。

大島さんからの感想には，「自分が語ったことなのに，学生さんが書いたコメントに涙がでてきてしまう」とある（2009年）。「全体を読み終わる頃，自分でも涙がにじんでいることに気づく。戦争には話したくない事，話せないこともあることを知ったと書かれている文面に接した時である。苦しさの頂点を理解してくれた言葉だった」（2019年）。戦争には話せないこともあるけれども，やはり話しておきたい，若い世代に伝えておきたいという大島さんの熱意，勇気に，学生たちが真剣な態度で耳を傾けてくれたからこそ，こうした心の交流は生まれるのであろう。学生さんにも感謝したい。

大島さんが整理された学生たちのコメントを見ると，例えば，2009年は，「戦争とは残酷なもの」（13），「親が子を殺める衝撃」（11），「親のありがたさを思う」（11），「家族のありがたさを実感」（8），あるいは「愛犬ちびとの別れは悲しい」といった感想もある。

また近年はたとえば2019年は，「生死を分ける貴重な話が聞けてよかった」（13）「戦争体験者の話は初めて聞いた」（5）。2021年は，「戦争の悲惨さがよくわかった。戦争は絶対にいけない」（7），「命の大切さを感じた。実体験者の話を聞けて良かった」（4）。2022年は，「戦争の実体験を生で聞いたのは初めてで残酷・非道だ。戦争は恐ろしい」（13），「戦闘場面・実態を知った・本物の話を聞けて良かった」（13），「戦争は絶対だめだ」（5），「自決しか道が無い，親が子を殺めるなんて残酷すぎます」（5），といったコメントが書かれていた。

こうした学生さんのコメントを見ると，第一に，大島さんの語りの力を感じる。爆撃機や戦車の音をご自分の声で伝え，あたかもその場にいるような臨場感で，戦争の体験を伝えて下さっていることがわかる。また，チビとの別れ，あるいはお母様の絶望を語る場面では，涙ぐみ言葉にならない。つらいことを思い出させて申し訳ないという思いもあるが，そうした苦しさや葛藤を抱えながらも言葉を紡ぎ出して下さっている大島さんには，心から感謝している。

第二に，大島さんの熱意が学生さんに通じ，学生さんが素直に受け止めてくれていることがわかる。戦時下での自決の集団自決の話であり，聞いている者にとってつらさもある。しかしながら，毎回，学生たちが真剣に大島さんの話に真摯に耳を傾けてくれるのは，本当にありがたいことである。こうした話は無理にでも聞いておかなければいけない，とコメントしてくれる学生さんもいる。

第三に，近年になるにつれて，「実体験を生で聞いたのは初めて」「貴重な生の体験を聞かせていただきありがとうございます」という感想が増えており，戦争体験を語る人が周囲にいなくなっ

ている時代の流れを感じる。

これは筆者の授業を通じての経験からも感じることである。筆者は、「社会教育史」の授業の中で、「草の根社会教育」として、自分の祖父母世代、父母世代が生きてきた時代の社会教育について、ライフストーリーを聞いてくるという課題を出している。この課題は、2003年より設定しており、すでに約20年になる。当時は1920年代生まれ、あるいは1930年代生まれの祖父母に話を聞いてくる学生さんが多かった。そこでは戦争体験（中国戦線、満洲引き揚げ、東京大空襲、長崎原爆、疎開、シベリア抑留）がしばしば語られていた。しかしながら、2020年代以降の傾向として、学生さんの祖父母世代といってもすでに1940年代生まれ、あるいは1950年代生まれも登場し、戦争の記憶を持たない世代になっている。

近年では、戦争体験の次世代への継承のために、戦争に関する博物館において、戦争体験者の証言が動画で流されている所が少なくない。たとえば広島平和記念資料館、沖縄のひめゆりの塔・ひめゆり平和記念資料館での生存者の語りは、心に迫ってくるものがある。しかし、語りはあくまでも動画の中の話であり、映画やテレビ番組と同じものとして消費されていくようにも思われる。現在、生存者から直接に声や表情として、戦争の体験を聞く機会が急速に減少していると感じる。

第四に、大島さんの語りに対する学生さんの受け止め方であるが、以前は、「親のありがたみを実感」（2009年）したり、「生かされている自分を認識」（2009年）したり、「愛犬とか家族の死別はとても悲しい」（2015年）というように、自分の身にひきつけて当事者として戦争の在り方を考える感想が多かった。しかし、次第に、「生で初めて戦争について聞いた」（2022年）といったものや、あるいは「戦争はこわい、戦争はいけない」（2022年）という一般的、抽象的なコメントが増えてきているように思う。

たまたま2022年の授業で、ある学生が、大島さんの心情によりそのようなコメントを書いていた（「語るのは本当におつらかったでしょう、その中で語ってくださってありがとうございました」）。このコメントは、大島さんにとっても、印象に残ったようであった。

その学生に聞いたところ、自分の曾祖母が戦争体験者で戦争のために家族を亡くした話を聞いたことがあるので、大島さんのことを他人事とは思えなかったと語っていた。大島さんの立場に立ち、身近なものとして戦争を受け止めることができるのは、自身の家族・知人から以前、戦争体験を聞いているかどうかによっているようにも思われる。周辺の家族・知人からの語りとして戦争の話聞くことがなければ、こうした共感的な理解は難しい。

また、一般的に戦争の話は、家族の中で気楽に語ることでできる話題ではなく、家族の中で戦争の記憶が継承されているわけではないことも、指摘しておきたい。

第五に、コロナ前は学生の中に中国、韓国からの留学生の数が多く、コメントがより多角的であった。たとえば、「私は留学生です。残留孤児を育てた話は書物で読んだことがあります。中国と日本の間には歴史上たくさん問題がありました。今では過去の問題です。過去に束縛されるのはよくないと思うのです。相互に留学生を交換し、現代の楽しい経験を積むように望みます。……今日の話は

涙が出るくらい感動しました」(2018年)。といったコメントもある。前向きに日中関係をとらえようとしており、嬉しいコメントである。

その一方、「ソ連も中国人も虐殺に加担したかもしれないが、元は日本の侵略でしょう。事件後に残留孤児を助けた中国人のことも触れてほしかった」(2018年、留学生)というコメントもあった。戦争が生じる経緯についての批判的なコメントは、日本人にとって貴重なものである。しかし、近年は留学生も減少しつつあり、戦争をテーマとして日本とアジアの若い世代が率直に語る場が持たなくなっているのは残念である。

戦争体験の継承は難しい。戦争体験の経験者に語ってもらう場合、ややもすれば、語る側が一方的に知識を伝達する立場、聞く側が一方的に受け身的に聞くという図式の固定化が起きがちである。

大島さんは「戦争はいったん始まってしまうと、(坂道をころげおちるようで)止めることができない」と話をされるが、であるならば、大島さんの話を聞いた上で、ではなぜ、戦争は起きたのか、戦争がおきないようにするにはどうすればいいのかを考えてもらうことが大切である。

そして、なぜ戦争は起きたのかについて、青年層の戦争動員システムを果たした戦前の社会教育の役割を批判的に検討することが、「社会教育史」という教科の一つの大きな目的なのであろう。自分自身の力不足とともに、これは授業担当者としての筆者自身の大きな課題であることを自覚している。

現在、ウクライナとロシアとの間で戦争が膠着状況の中で、戦争体験者の語る言葉は貴重である。大島さんは、葛根廟事件の被害者であるにも拘わらず、「ロシアには日露戦争敗戦の恨みがある。日本もロシアに恨みがある。恨みは末代まで 恩義もまた末代まで」と冷静に語っておられる。であるならば、どのようにすれば、恨みの連鎖を断ち切ることができるのであろうか。

また「戦争は指導者の背伸びから始まる。始まれば破壊と殺人の競争。勝者なき戦い。終わってみれば多額の費用と多くの損失」、「防衛費上げても食えないよ。戦費に使っても得ないよ。動き出したら止まらない。戻れない道に進むのだよ」と述べておられる。こうした大島さんの発言を真摯に受け止めていきたい。大島満吉さん、本当にありがとうございます。大島さんが与えてくださった宿題を、これからも地道に考えていきたく思います。1935年にお生まれの大島さんは、2023年の12月に米寿を迎えられるという。これからも是非、お元気で、「生」の戦争体験を若い世代に伝える存在としてご活躍ください。

#### 注

- (1) 興安街命日会の役員は以下の通り（相談役：藤原作弥、代表：大島満吉、2013年）。興安関係の引揚者の会としては、興安会（阿部寛行代表）もあったが、関係者の高齢化に伴い、2011年に解散。
- (2) 以下の9回である。①2009年11月13日、②2014年11月4日、③2015年10月27日、④2017年11月21日、⑤2018年11月6日、⑥2019年11月19日、⑦2021年11月9日、⑧2022年11月15日、⑨2023年11月14日。
- (3) 大島満吉（興安街命日会代表）、講演記録「葛根廟事件」、興安街命日会編『葛根廟事件の証言—草原の惨劇・平和への祈り』、新風書房、133-149頁。大島さんの引き揚げ記録として『流れ星の彼方』（私家版）もある。

- 
- (4) 興安総署は、「満洲国」内のモンゴル人居住地区。
  - (5) 日本内地が約 7000 万、外地が約 3000 万と言われる。国勢調査によれば、1935 年：69,254,148 千人、1940 年：73,075,071 千人、1940 年は、1935 年比で人口増加率 5.5%。
  - (6) 関東軍から南方へ引き抜かれた兵力を補充すべく 1945 年 1 月 16 日に残存兵力の再編成が行われた。その後、敗戦間際の 7 月 10 日に満洲居民 15 万人、在郷軍人 25 万人が「根こそぎ動員」によって動員された。

---

## Abstract

### **An Attempt to Pass on the War Experience: Narrative by Mankichi Oshima, a Survivor of the Kakkonbyo Incident**

**Atsuko SHIMBO**

This paper is a transcript of a lecture given by Mankichi Oshima, a survivor of the “Kakkonbyo Incident (Gegenmyo Incident),” a Soviet attack on Japanese civilians in Gegenmyo, Manchukuo, on August 14, 1945.

Mr. Oshima lived in Xing’an (now Ulanhot, Inner Mongolia), the capital of the Xing’an General Province of “Manchukuo” before the war, and experienced the Kakkonbyo Incident (Gegenmyo Incident) during his evacuation after the August 9, 1945, Soviet invasion of northeastern China. In this incident, Japanese civilians were devastated by an attack by Soviet tanks. This incident was one of the most tragic and costly incidents in the process of Japanese evacuation from Manchukuo after the defeat in World War II.

The evacuees at that time were mostly women and children because of the mobilization of many adult males in July 1945 to fill the vacuum left by the Kwantung Army’s movement to the southern front as the Japanese front expanded. In addition, wagons and other vehicles were requisitioned by the Kwantung Army to prioritize their own evacuation. As a result, most of the evacuees from Xing’an were women and children, and it was very difficult for them to evacuate on foot.

On August 14, as the lead group of displaced persons was approaching the Kakkon (Gegen) Temple, a Tibetan Buddhist temple, 14 Soviet tanks attacked them. In addition, soldiers dismounted from the tanks and shot at the surviving civilians.

Many of the Japanese survivors chose to commit suicide in despair, fearing that the women and children could not survive alone. The family of Ms. Oshima, who was in fourth grade at the time, miraculously survived. After returning to Japan, the survivors, including Mr. Oshima’s family, organized the “Xing’an Street Life Day Association” and have held a memorial service every year on August 14 to comfort the spirits of the victims.

I invited Mr. Oshima as a guest speaker in my classes at college. This paper is based on Mr. Oshima’s talk in 2022.

This paper discusses the importance of conducting activities to pass on such war stories as part of examining why wars occur, as war survivors grow older and their memories fade with the passage of time.